

「もっとウキを知りたい～基本を覚えて使い分けよう～ウキ戦術～」

第9章 ペレ宙用のウキとエサ落ち目盛りの設定について

今回は「ペレ宙用のウキ解説」と「エサ落ち目盛りの設定」をテーマとする。ペレ宙といえば、1～2mのタナに長ザオでペレット系の両だんごを打ち、大型を狙う釣り方だ。この10年間で、盛期の釣り方の1つとして定着し、新たな釣り方の分野を確立した。

そのペレ宙用ウキの考え方や機能について、「尽心作」製作者である北村滋朗氏に紹介してもらおう。

また、エサ落ち目盛りを決めるときの基本的な考え方などについても、整理・解説することにしよう。

ペレ宙用のウキコンセプト

Type-B：盛期のペレ宙用

ペレットを含んだ重くて大きい両だんごエサを打ち続けるペレ宙。当然、この釣り方に使用するウキは、そうした重くて大きいエサをしっかり支え、タナをつくって釣り込むときにも対応しなくてはならない。

ボディはくさび型（V字型）とし、重心をウキ上部にしてオモリが高い位置の沈下中のときにウキを立たせ、トップのなじみ途中にウケが出やすい形状にしている。

トップの太さは極太のパイプで、ペレットを含んだ重くて大きな両だんごを支えられる設計にしている。

足は比重が重く、また細く削り込んでも強度があることから、なじみ込みの良いカーボン製とし、長さは足長ウキの標準といわれる60mmとしている。



Type-B (ペレ宙用のウキ)

カーボン足、くさび型ボディ、極太パイプトップ

使い方

エサ落ち目盛りの設定は、全7目盛りの場合、トップ先端から4目盛り、もしくは5目盛り出した所を基準とする。全9目盛りの場合は5目盛り、もしくは6目盛り出した所。

これは底釣りの場合とは逆で、ウキの余浮力を余り残さないセッティングである。それはトップのストロークを十分に活かし、かつへら鮎がエサを吸い込んだ時に違和感を感じさせないセッティングである。つまり、トップのなじみ途中にサワリを出し、トップ先端1目盛り残しでなじみ切ったところでのしっかりしたアタリを狙う。

もし、ウキのなじみ込みが悪いと感じれば、エサ落ち目盛をトップ上部に変更し、ウキの余浮力を減らしてなじみを良くする。

エサ落ち目盛りの設定について

エサ落ち目盛りの設定方法について、考え方を整理してみたい

エサ落ち目盛りを決める基本的な考え方は、まず、

① トップの復元力をどれほど残すのか

なじんで戻ってツンのアタリを狙う標準的な底釣りでは、トップの戻りが重視される。そのため、トップの持つ復元力を最大限に生かすために、エサ

落ち目盛りはトップ中間よりも下にエサ落ち目盛りを決めたほうが良い。

逆に宙釣りの場合には、復元力が強いとへら鮎がエサを吸い込んだ時に違和感を感じるため、カラツンの原因になる場合もある。そのため、宙釣りでは、トップ中間あたり、もしくはその上でエサ落ち目盛りを決めたほうが良い。

② トップの長さをどれくらい有効に使うのか

なじんで戻ってツンのアタリを狙う底釣りでは、上ずりを防ぐ意味でも、トップがなじんでいくときのサワリはできるだけ少ないほうが良い。このことから、エサ落ち目盛りはトップ中間よりも下でエサ落ち目盛りを決め、トップのストローク余り使わないようにしたほうが良い。

逆に最近の宙釣りでは、動いているエサにしか興味を示さない場合が多い。エサを打ってなじみ切るとトップ先端がギリギリ水面に出ることを前提にし、なじみ幅を4目盛りにするならば、トップ付け根から2目盛り沈めた位置でエサ落ち目盛りを決めると、トップの長さは4目盛り（なじみ幅）+2目盛り（沈める目盛り）=6目盛り必要となる。

一方、トップ付け根から4目盛り沈めた位置でエサ落ち目盛りを決めると、トップの長さは4目盛り（なじみ幅）+4目盛り（沈める目盛り）=8目盛り必要となり、トップの長さをより有効に使うことができる。

トップはエサが落下していく状況とへら鮎のさわりを表現し、トップの太さ（体積）と長さの違いにより、異なった情報を発することになる。トップを細く、長くした場合には、トップのストロークにより、ハリスを長くした場合と似た効果を得られる。しかし、ハリスだけを長くするとハリスが張りにくくなるので、アタリをウキに伝えにくくなる。

トップの長さを有効に使うと、ハリスを長くした場合と似た効果を得ながら、ウキにはアタリが伝わりやすくなる。

逆にトップを太く、短くした場合には、ハリスを短くした時のように、へら鮎の層を凝縮しやすくなる。

エサ落ち目盛りを決める基本的な考え方は、トップの復元力を生かすのであればトップの付け根近、トップの長さを生かして、エサの沈下途中のさわりをより表現させるのであれば、トップ中間、もしくはその上でエサ落ち目盛りを決めたほうが良いということになる。

結論から申し上げますと、エサ落ち目盛りは①へらブナの密度②へらブナの活性③底釣りの場合には底の状態によって、ケースバイケースで変化させるべき、と考えている。

エサ落ち目盛りの変更

私に限って言えば、ウキを製作する際には、ここをエサ落ち目盛りにしようという考えは持っていない。できるだけ軽く仕上げるということに集中している。

底釣りの場合、どんなに軽く仕上げてても、底の状態が悪ければウキの戻りは悪くなってしまう。こんなとき、最初に決めたエサ落ち目盛りよりも、1目盛り余分にトップを出すだけで、トップの余浮力が増し、復元力がアップするので、ウキの動きが変わることがある。

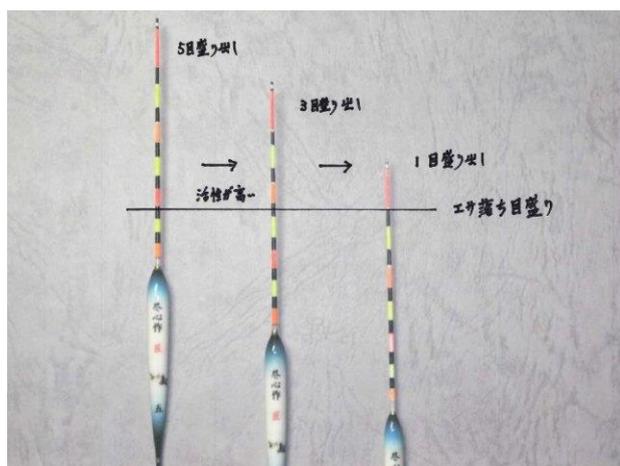
同様に、両だんごの浅ダナ釣りでカラツンが多発する場合、最初に決めたエサ落ち目盛りよりも1目盛り余分にトップを沈めるだけでトップの余浮力が減少し、へら鮎がエサを吸い込んだ時の違和感を減らすことができることから、カラツンが食いアタリに変わることがある。

●カッツケ釣りのエサ落ち目盛り（パイプトップ・全7目盛りの場合）＝トップ先端から5目盛り出しを基準にして、活性が上がるに従い3目盛り出し→1目盛り出しにする

エサ落ち目盛りをトップ先端1目盛り出しに設定にすると、たとえへらブナがハシャいでウキがなじみにくい状況であっても、ウキがなじみやすくなる。

また、ウキが立った瞬間からなじみ切るまでの間、エサが沈下する途中の早いアタリを取ることができようになる。これは宙釣りにおけるトップの長さを利用する典型的な例である。

イラスト1 ●カッツケ釣りでのエサ落ち目盛り



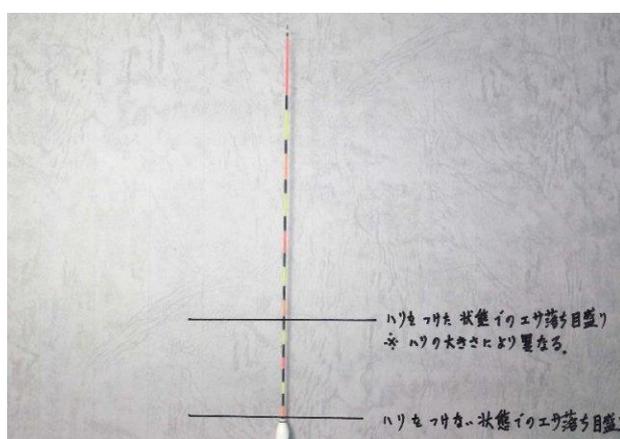
●チョウチン両だんご釣りのエサ落ち目盛り（ムクトップ・全11目盛りの場合）＝ハリなしの状態、トップの根元に設定する

これはムクトップ（PCムク、グラスソリッド）を使用する場合、ウキがトップ付け根で立ち上がるようにするためのセッティングで、トップの長さを最大限に生かす有効な一手となる。また、底釣りやチョウチン釣りでムクトップウキを使いヘラブナがハシャギ気味になった場合、ハリを重いものに変えることにより、エサ落ち目盛りを簡単に変化させることができる。

これはオモリ負荷量を増したときと同じ効果を、ハリを大きくするだけで簡単・スピーディにできる例である。

「尽心作・匠」では、このエサ落ち目盛りの設定方法に対応しやすくするために、トップとボディの接合部を透かしにしている。

イラスト2 ● チョウチン両だんご釣りでのエサ落ち目盛り

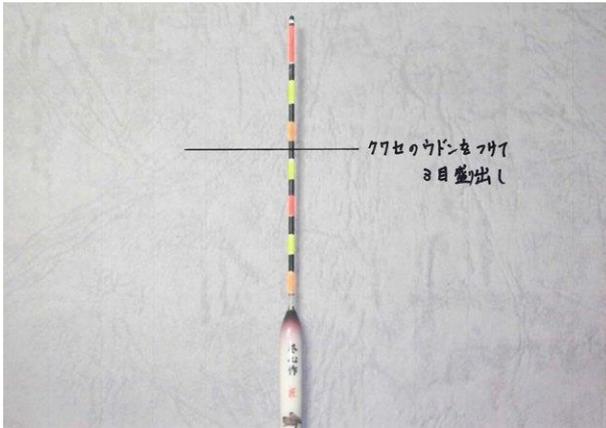


● ウドンのセット釣りのエサ落ち目盛り（全7目盛りの場合）＝ウドンのみを付けた状態で、トップ先端から3目盛り出し、もしくは4目盛り出し

3、4目盛りでバラケエサを調整しなければならないが、この範囲内でバラケエサを調整するため、ヘラブナの変化やエサの変化をつかみやすい。

3目盛り、もしくは4目盛り出した所の目盛り、俗に言う「勝負目盛り」の色を赤にするのかオレンジにするのか、これは個人の好みとなる。自作ウキの良さは、この「勝負目盛り」の色も自分の好きな色に配色できることにある。

イラスト3 ● 浅ダナウドンセット釣りでのエサ落ち目盛り



トップの汚れについて

読者の皆様は、釣行後にヘラウキの手入れをされているでしょうか。納竿後、穂先、穂持ちを拭くと、池の水汚れがベツトリくっ付くことがある。ヘラウキも同じことが言えるので、釣行後には水道水でウキを洗っていただきたい。

また、私は釣りを始める前に、重曹を使ってトップとボディーをこすり、ウキに付着した汚れや油分を除去している。タバコの灰を使用する人も多いのだが、タバコの灰は効果絶大である反面、トップの蛍光塗料まで剥がしてしまうことがある。

重曹はタバコの灰ほど効果はないが、あまり蛍光塗料を剥がすことなく、同様の効果を得ることができる。美しく仕上がったウキをタバコの灰でゴシゴシとこすりたくないというのが本音である。



重曹を濡れた指に取り、トップとボディーをこすれば、ウキに付着した汚れや油分が除去され、なじみ込みがスムーズになる

親水コート

親水コートについては、以前よりかなり興味を持っている。

夏場、流れがない釣り場の水質は悪化しやすく、悪化すると水の粘度が強くなり、ウキの立ち上がりやなじみ込みが悪くなる。また、ウキに汚れが付くと水の粘性抵抗がより強くなり、ウキが十分なサワリを表現できなくなることもある。

こういった状況下では、ミチイトの表面にも水汚れがつき、沈みにくくなることもある。

写真にある「親水コート」をミチイトに塗布すると、塗った直後は余り効果を感じないのだが、光と反応して除々に親水効果を発揮する。

また、この「親水コート」を塗布する際に、スポンジ部分でミチイトを拭くことにより、ミチイトに付着した水汚れを取り除くこともできる。



サオ先からウキまで距離があり、ミチイトを沈めるのに苦労するときは、親水コートを使うとミチイトが沈みやすくなる。



親水コートのスポンジ部分でミチイトを拭くと、ミチイトの汚れを除去することができる。

野池を主戦場とする九州では、浅ダナの主体となるサオは11尺～18尺、私の場合は13尺、15尺が最も出番が多いサオとなり、当然、サオ先からウキまでは距離があり、ミチイトを沈めるのに一苦勞となる。

サオ先を沈ませてミチイトを沈めるのが王道ではあるが、このような補助的手段を使うのも有効である。

なお、この親水コートはウキのトップには簡単には塗布できない。

溶剤がトップに塗ってある蛍光塗料を溶かしてしまい、色流れを発生させるからだ。また、この溶剤が道糸の強度に影響するのかもしれないか、検証も必要と考えている。親水コートは、私にとって今後の研究課題のひとつである。

次回は「カッツケ釣り」用のウキについて解説する予定。